

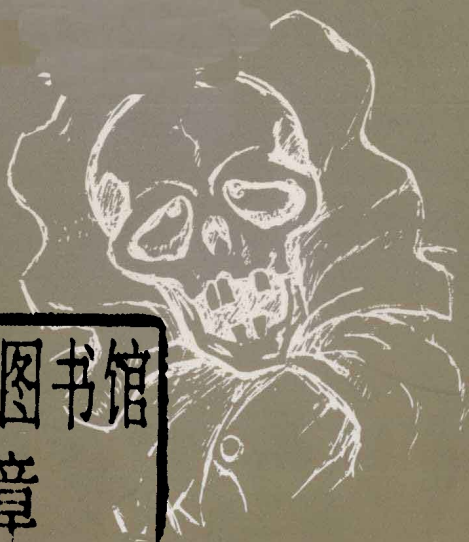
小説 黄金バット

加太こうじ



筑摩書房

江苏工业学院图书馆
藏书章



小説 黄金バット

加太こうじ

筑摩書房

小説・黄金バット

一九九〇年八月三十日 初版第一刷発行

著 者／加太こうじ

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六―四

電話東京五六八七―二六八〇(営業)

五六八七―二六七〇(編集)

振替東京六一四―二三

郵便番号一一一

印刷／三松堂 製本／永興舎

乱丁・落丁本の場合はお取替致します

目 次

第一章 黄金バット出現

プロローグ 七

夜景 九

黄金バット出現 三

紙芝居屋群像 三

黄金バットの正体 四

警察 六

トンネル長屋 九

活劇 八

第二章 追いつ追われつ

新年 三

第三章 街に吹く風

春 二〇六

電車 一九九

後継者 一三三

泥 亀 一三九

鉄火場 一五二

敏子の運命 一五五

統・敏子の運命 一九九

偽せ者 一六六

街 景 一五九

訊 問 一六三

幸 福 一九八

長 雨 二〇六

似顔

二三

正体

二九

敏子をめぐって

二三

救出

三〇

大団円

三四

あとがき

三四

第一章
黄金バット出現



プロローグ

「お静かに、あなたが目をさますまで待っていたんです、さわぐと手荒なことをしなければなりませんので……」

「君はだれだ、なんでここへきたんだ」

「おカネを拝借に参りました。世間じゃあ、あたしのことを講釈強盗といっています。あ、奥さんもお目ざめですか、なあに、ほんの少し頂けばいいんです。昨日は月給日でしょう、たしか、あの仏壇の引き出しのなかに銀行にあずけようって分がはいってるんじゃないヤありませんか」

「君、よく知ってるな」

「蛇の道は蛇ひびつてわけで、一週間もかかって調査しました。しかし、あなたは物わかりがいい。あたしは銀行に置いてある何千円なんて大金を頂こうってんじゃないんです。そんなことをするのは詐欺か恐喝のきたねえ野郎です。あたしなんざあ、こうやって夜の目も寝ずにまじめに、いのち賭けで働いてるんです。食っていかれるだけのおカネを頂けりゃあいなんです。そいじゃあ、このドスはしまっておきます。奥さん、起きてって仏壇の引き出しから持ってきてくれませんか」

「おい、持ってきてやれ」

「お宅なんざア、ご夫婦二人でおだやかな暮らしをしていなさる。息子さんは今、出張でアメリカへ行つてなさるとか。あのねえ、世の中には明日の米も買えねえってんで、一家心中をしたり、間屋への支払いができなくなって、夜逃げをする小商人が、ざらにいるんです。なあに、あなたのことだ、先刻ご承知でしょうがね……」

「おい、これ、全部やる。取っておけ。きいてると講釈強盗といわれるだけあって、話すことも態度もしっかりしている。強盗なんかやらなくても、ひとかどの人間として生きていけると私は思うがね」

「それがねえ、先生は大学教授、学問があつていいお友達がたくさんいらっしゃる。あたしはしがねえ貧乏人で、小学校も満足にでていねえんです。おとつと、余計なこと、いっちゃまって。あのね、あたしは裏の塀を乗り越えて庭へはいつて、昼間、塀越しにはうりこんでいた風呂敷包みのなかから、懐中電燈とか釘抜きとか、おどしのための刃物を取りだして、その黒い風呂敷で、こうやって覆面をしてるんです。便所の窓を少しこわしました」

「ふうん、塀越しにね、それで便所の窓の棧をはずして家のなかへはいったつてわけか」

「へい、そうなんです。ここの家、裏の塀の電信柱があるところに街燈をひとつつけりゃあ、電信柱をのぼつて塀の内側にはいるのが気おくれがしてできません。泥棒よけには要所要所を明るくして、犬を飼うのが一番いい。なあに、人を見たらやたらに吠える馬鹿犬がいいんです。利口ない犬は人間にすぐなつくから、餡パンのひとつもなげてやりゃア、吠えなくなつちまうんです」

「なるほど、防犯の講義だな、今度から君のいう通りにしよう」

「釈迦に説法で、とんだことを大学教授先生に話しちゃった。すいません。あたし、このおカネ頂いて帰ります。もうしばらくで一番電車がですすから。あたしが帰ったら交番へお届けなさい。届けないとなとでうるさいから、三丁目の交番が近うございますよ。あ、申しわけありません。電話は線を切ってありますから、電話で交番に知らせるわけにはいかねえんです。どうもありがとうございます。これだけありやア、当分、静かにのんびりと暮らせます。しかしねえ、インテリってのは物わかりがいいし、さすがに大学教授だけあって度胸もいい、感心しました」

「強盗でもお世辞をいうのか」

「へへへ、すいません、奥さん、おさがせしました。それではこれで失礼いたします。おからだ、大切に、息子さんがお帰りになったらよろしくお伝えください、さようなら」

夜 景

昨日から降っていた雨が、夕方になると急にやんで宵の明星が輝やいた。

浅草・雷門前で市電から降りた石田森男は、停留所からちょっと吾妻橋のほうへ行つた角の酒場へはいつて電気ブランと塩辛を注文した。泥酔をさせないために一人に三杯以上は飲ませないという合

成酒のブランデーが神谷^{かみや}の電気ブランで、しゃれた感じの細身のグラスにはいつている。塩辛を箸でつまんで一口舌先へのせて飲みこんで、塩味が残っているところへ、甘味の強い電気ブランを流しこむとアルコールの刺激と甘さがさわやかに感じられる。

店内は満席といえるほどに混雑している。

森男はこういうにぎやかさが好きだった。

客たちの会話がひびき合った騒音と、少し疳^{かんだか}高い声で

「おでん二つ、お銚子二本、ブラン三杯、ぬたひとつ」

などと客の注文を調理場へ知らせるボーイの声がまじり合って、いかにも東京一の盛り場へきたという気分になる。十人ほどがいっしょになるテーブルの端にいる森男の前の客は、中年の職人らしい二人連れである。一人はおしゃべりで、あとの一人は聞き役らしい。

「ひでえよなあ、こないだ、二千人も首切ったばかりの東洋モスリンで、また、何百人か首にするってんで、うちの隣りの人なんざあ心配で眠れねえとよ。そうだろうって、この不景気のまっ只中に、たかがモスリン会社の職工が、首切られておっぱりだされてみる、うっかりすりゃあ妻^{さいし}子もろとも餓え死にだ」

「そこいいくと、こつちとらはなんとか腕に職ってやつで、おまんただけは頂いてらあ」

「そうよ、それでも、仕事は月に十五日、半分は休みだ、その上、こちとら大工は屋根ができるまでは雨が降ると休みだから、うっかりすると月に十二、三日しか仕事がねえ、それでも、今年は七月か

ら仕事がつづいていたから、こうして雨の日はこれさいわいと、浅草へきて一杯やれるってもんよ」
「そうになると、泥棒ってのはいい商売だね、今評判の講釈強盗、一カ月に二、三回のかせぎで月に百円になるって新聞にでてたぜ。それに、稼ごうと思えば雨降り風間休みなしだ。どこのどいつが講釈強盗か知らねえが、正体がわかったら顔見てやりてえよ」

二人の大工の横でビールをなめるように飲んでいた鳥打帽子に古背広でネクタイをきちんと締めた四十がらみの男が、二人のほうを鋭い目じでじっと見て、なっとくがいつたらしくて視線をジョッキを持つ手許に移した。

森男はその鳥打帽子の男が、さっきから気になっている。というのは、電車のなかでいっしょになって、同じ雷門の前で降りたが、森男が先に電気ブランを一杯ひっかけようか、それとも飯かとまよっていたら、その男も森男のすぐそばに立ちどまって、空を仰ぎ見たり、煙草を吸うようにバットの箱をだしたり、森男が酒場ときめて、そっちのほうへあるきだすと、煙草は吸わずについてきて、森男の斜め向いの空席に腰を降ろした。それから、森男のほうを見ないふりをしている。
デカらしいぞ、おれを尾行してるのかと森男は判断した。

釣り銭はいらねえと、十銭白銅二つをボーイに渡して森男は酒場をでた。森男は雷門通りを雷門のほうへ行つて、雷門も雷おこしも通り越した左側の屋台店へはいった。吾妻橋寄りの神谷バーの前から田原町の交差点の角まで、東京市電の電車通りを背にして、露店が並んでいるが、そのすべてが屋台店の飲食店である。森男がはいったのは、白いのれんに洋食河金と書いてあつて、森男と同年輩の

三十前の店主が、一人いる客の注文でカツレッツを揚げていた。

河金の店主河野金一はのれんを分けてはいつてきた森男を見ると、「やあ、親方、いらっしやい」と、常連にだけ見せる笑顔であいさつをした。そして「いつもの……」という。「うん、それとお銚子一本、冷やでいいや」と森男は応えて椅子に腰をおろした。そして、振り向いて、のれんの隙き間から外を見ると、自分を尾行しているらしい鳥打帽子の男の横向きの姿が見えた。

森男はその刑事らしい男に、大声で、「旦那、おはいんなさい。どうです一杯」と声をかけた。おどろいて声のほうを見た男に森男は「ここ、あいてますよ」という。仕方がないと観念したのか、男はのれんのなかにはいつてきて、河金の主人に「やあ」といった。「あ、旦那ですか、きょうは何か、え、この人、この人は紙芝居の親方で石田さんてんです。おとくいさんでして……」と河金の主人は森男を紹介して、森男には、「この旦那は菊屋橋署の岡部さんですよ」といった。

「君、つけてんのわかったのか」と、いつて岡部刑事は森男の隣りに腰掛けた。河金の主人がお猪口ちよこをふたつと冷や酒のはいつた徳利を一本、森男の前のカウンターに置く。森男は「ひとついかがで」と岡部刑事の猪口に酒をついですすめた。

「いや、どうも、なにね、君が新調のニッカボッカーに新調の上衣に鳥打帽、靴も新らしい。この不景気にカネまわりがいい。それに講釈強盗がニッカのズボンつてきいてたから、……いや、すまん」「旦那、これにしちゃあ、正直でいい人だ」

と、森男は親指と人指し指とで輪を作ってひたいのあたりへかざした。警官というのをかたちで示し

たわけで一種の符牒である。

森男は自己紹介をする。

「あたしは石田森男っていつて、以前は馬方やってたんですが、去年から三の輪の市電の車庫に近い三河島正庭^{まさになむ}で紙芝居を作つて、売り子に貸してるんです。新しい商売で、今年になってやりはじめたんですが、不景気の失業時代だから、売り子のなり手があとから、あとからときてねえ、そいで、商売繁昌つてわけなんでさあ」

「ふうん、すると、拍子木たたいて子どもを集めて飴を売る、あれかい。うちの署のあたりでは春頃からやりだしたが、子どもの人気は大したもんだ」

「それなんです。紙芝居つてのは元は写し絵っていつて、幻燈からきたもんで、明治の中頃、紙人形の芝居に変わったんだってきいてますが、お宅がね、いえ、菊屋橋の警察が去年の暮に、管内で紙芝居はやっちゃあいけねえ、毒婦伝とか三尺物とか、怪談ばかりやつて、子どもの教育のためにならねえつてんで禁止した。そいでね……」

「いや、すまん、しかし、あれは……」

「いいんですよ、おかげでこっちは大もうけだ。実はね、商売禁止になったんで菊屋橋管内をまわつてた若い紙芝居屋が二人とあたしは困っちゃつて、苦しまぎれに絵物語をやりだしたんです。新聞の三行広告で絵描き集めてさ、八十人もきましたよ。そいで、松葉町のトンネル長屋で失業者に絵を貸して、飴の卸しをやつたら借り手がふえちゃつてね、菊屋橋警察さまたつてとこですよ、おかげで、

私たち三人、親方っていわれて、三河島に店を持ってのうのと食ってられるんです。今日は、夕方近くまで雨で紙芝居は休みだから……旦那、秋らしくなりましたねえ」

「ふーん、景気がいいのか。不景気で失業者がふえる、その失業者相手に絵を貸して館を卸す、なるほど、借り手はふえるわけだ、今、全国に百万人を越す失業者がいるってからなあ」

「百万どころか、日本に働く男が三千万人いて、そのうちの半分の千五百万人の一割が失業者だって、こないだ、だれかが教えてくれました。紙芝居やってる人にゃあ、学校の先生やって、失業したって人もいます。あたしたちの師匠は学校で童話を話すのが本職だが、収入が少なすぎるんで、紙芝居やって食ってるんです。尾久の裏長屋に表札だけはでかく土族村尾光夫ってでてるんだが、いい人でねえ。その人、物知りなんです」

ほろ酔い機嫌で、しゃべる商売の紙芝居屋の親方がしゃべりだしたから、岡部刑事はめんどろになつてきた。

「いや、お世話になった。ちょっと、ほかにまわるところがあるから。おやじ、代金は」

そういう岡部刑事に、森男と河金の主人の二人が、いっしょに「いいんですよ」といった。

「石田さん、あの刑事は菊屋橋署の腕ききで、このところ、講釈強盗のきき込み専門にやってるらしいんです。それが、年から背格好まで、石田さんによく似てるらしいんです。年は二十七、八、がっしりしていて背は五尺三寸ってとこで、ニッカボッカーはいてるそうです。こないだ、今の岡部刑事がきて、私に、心あたりがあったら知らせろっていったから、それによく似た人がと、石田さんの